CLCからしだね書店便り

CLC INTERNATIONAL

4 April 2024 no.40

＊今月のご案内＊

① 連載第４回
「子どもと大人のためのこころの対話
―信仰と哲学」

②読書感想本『深い河』

③ 被災地レポート
（福祉の視点からのお話をする機会を通して）

ＣＬＣからしだね書店では…

1. キリスト教書だけでなく、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もそろえています。
2. お洒落 でかわいい雑貨や小物もあります。
3. ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
4. コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
5. 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、お好きな本を手に取ってお読みください。
6. 古書のコーナーもあります。ほりだしものあります。
7. 読書会や著者を招いての講演会など、人と人とが出会い、つながる「対話」の場を提供します。

CLCからしだね書店＆カフェ トライアングル
営業時間 11:00-17:00
定 休 日 日曜日と年末年始（※祝日も営業）
毎月第３木曜日は書店のみ営業

子どもと大人のための こころの対話

連載第4回

―信仰と哲学

坂岡 大路

前回のあらすじ：
哲学カフェ「べれや」のマスターはからしちゃん、タネオくんと対話する。宗教的な規則や自分の信仰を絶対化する「律法主義」の問題。信仰が律法主義に陥らないためには「哲学」の力が必要なのだと、マスターは言う。

マスター：ある宗教団体から抜け出した脱会者が、こんな体験記を書いているよ。信者の実感がよく伝わってくるので読んでみてほしい。

> カルトは多くの場合、あなたが生きているのはこのためだ、という明確な答えを与える。あなたの人生はこういう意味があるのだ、あなたが今まで生きてきたのはこの教えに遇うためだったのだ、と。こうした疑問に答えを与えることで、その疑問に向き合う苦しみや迷いを消し去ってくれる。「もう迷わなくていい」のだ。これを私は「真理への依存」とか「正しさへの依存」と名付けている。（瓜生崇『なぜ人はカルトに惹かれるのか 脱会支援の現場から』）

からしちゃん：「もう迷わなくていい」人生って、すごく楽ですね！答えは全部決まってるってことですもんね。

マスター：「自分の信仰こそが絶対だ」と固く信じていれば、自我を安定させることができる。人より優位に立つことができる。迷うことも葛藤することもなくなる。これは、律法主義そのものじゃないけど、「自分の宗教的信念を絶対化して人を裁く」という意味では似た構造だと言える。

タネオくん：信仰熱心なこと自体はダメじゃないと思うんですが…。

マスター：もちろんそうだ。ただ、律法主義によって失われるものがある。それは他者の存在。すなわち隣人だ。律法主義者にとって、隣人は「自分と等しい人格」「尊厳ある存在」として扱われない。他者の存在は、「偶像崇拝者」や「異教徒」といった、非人間的なレッテルへと記号化されてしまう。

からしちゃん：前に宗教戦争の話でそんなことを言ってましたね（連載第一回）。「神の敵」「偶像崇拝者」は人じゃないから何をしてもいいって。

マスター：宗教が人類の平和を築くのに貢献してきたことは事実だ。でも、ある種の排他的な宗教は、相手を「エイリアン化」してきた。その結果、残酷性に歯止めがかからなくなってしまった。このことも反面の事実として覚えておく必要はあるだろうね。

タネオくん：ええと、なんだか話が脱線してきているように思うんですが、律法主義を克服するためになぜ「哲学」じゃなきゃダメなんですか？信仰だけじゃダメなんですか？

マスター：「信仰だけじゃダメ」とは言っていないよ（汗）。そうだな。むしろ、「信仰をほんものにしようとすると、必然的に哲学することになる」と考えたほうがわかりやすいかもね。前回は「そもそも何のため？」という律法の本質が失われた、という話をした。律法主義は、律法の根本精神を喪失したところから生まれたんだ。ここはタネオくんも納得してくれると思う。

タネオくん：納得します。

マスター：律法の本質は「隣人になること」だったね。これが律法の「そもそも何のため？」だ。この部分が忘れられてしまった。だからイエスは問いかける。「その教えはそもそも何のため？」と。

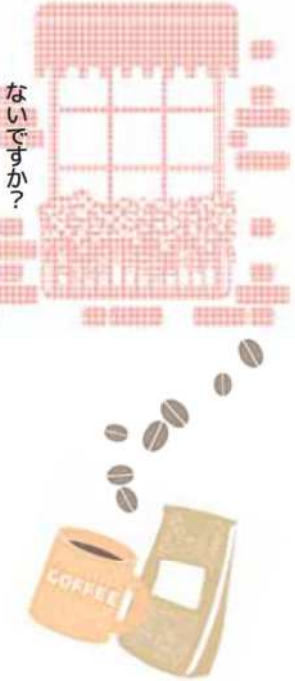
タネオくん：その宗教的規定は「そもそも何のため」に必要なのか。それを一緒に掘り下げていくことが哲学だというんですね。だからイエスは「哲学者」だったと？

マスター：「哲学者」だと断定すると違和感を持つ方もいるだろうけど、少なくとも哲学的な「ラディカリズム（物事を根本から問い直す姿勢）」を持っていた、とは言っていいんじゃないかな？

からしちゃん：それって、宗教的な規定にかぎらないですよね。社会のルールとか法律とか道徳とか校則とか。全般に言えることだと思う。

マスター：おっしゃるとおりで、当時は「宗教のルール」イコール「社会のルール」だったからね。法律と宗教が分離していなかったから、現代で言う「社会運動」や「政治的言論」の側面があった。

からしちゃん：だとすると、権力者にとっては迷惑な話なんじゃないですか？



マスター：イエスの伝道は迷惑というレベルを越えて、当時の社会秩序を破壊する危険思想だと思われていたようだ。支配者層に好都合な考え方を揺さぶるからね。

タネオくん：旧約聖書の預言者エリヤは、悪王アハブから「イスラエルを煩わす者」と呼ばれていたようですが（列王記上 18章17節）、まさしくイエスも「イスラエルを煩わす者」だったというわけですね。

マスター：ところで、有名な哲学者のソクラテスは、「アブのようなやつ」と言われていたんだ。ブンブンとやかましく、しつこく飛び回り、チクッと刺してくる、あの虫！

からしちゃん：めちゃくちゃイヤなあだ名だなあ（笑）

マスター：ソクラテスは、ギリシャの人びとに問答をしかけまくったんだ。みんなが「当たり前」と思っていることを揺さぶり、問いかけ、考えさせ続けた。そして結局、ソクラテスは死刑にされてしまった。

タネオくん：イエスの境遇と、どこか似たものを感じますね……

（つづく）

～作者よりひとこと～

今回のまとめです。

①「絶対的な正しい答え」を信じ込むことで人生に迷わなくなり、自我が安定する。

②それと引き換えに、他者の存在が「異教徒」や「偶像崇拝者」へと記号化（エイリアン化）される。

③記号化された他者は人間性を剥奪されるので、相手の想いや痛みについての想像力が働かなくなる。

④ラディカリズム（物事を根本から問い直す姿勢）は哲学の本質の一つだが、この精神を徹底しようとすると権力者と衝突することが多い。

哲学者の國分功一郎はスピノザ（17世紀オランダの哲学者）の解説本で、当時の哲学は命がけの仕事であったと指摘しています（『はじめてのスピノザ』参照）。彼らは当局にマークされながら、いつ捕まってもおかしくない危険な状況の中で、少しでも社会を自由に、平和にしていこうと奮闘していたのです。それでも彼らが「ラディカリズム」を手放さずにいたのは、「そうせずにいられなかったから」かもしれません。この精神は、預言者エレミヤの次のような吐露にも通じる気がします。

私が、「主のことばは宣べ伝えない。もう御名によっては語らない」と思っても、主のことばは私の心のうちで、骨の中に閉じ込められて、燃えさかる火のようになり、私は内にしまっておくのに耐えられません。もうできません。

（エレミヤ書20章9節）

「ほんとうによいもの」「真実なもの」を探究したい。この心に一度火がついてしまったら、もう後戻りすることができなくなってしまうようです

さかおか　おおじ
１９８８年京都市生まれ。北海道大学大学院教育学院臨床心理学講座修士課程修了。札幌市内の児童精神科で臨床心理士として勤務。本質学研究会、哲学プラクティス学会、宗教倫理学会、キリスト教教育学会等の学術誌に論文掲載。札幌市若者支援施設Youth+（ユースプラス）でワカモノ哲学カフェを主宰するなど、オンラインや地域で子ども・若者と共に哲学対話を行う活動に取り組む。

巡礼の物語として読む

『深い河』

（遠藤周作　講談社文庫、７８０円＋税）

遠藤周作の小説の多くは、読者を考え込ませるテーマを含んでいます。明確なテーマを含んだ小説としては、『沈黙』（不在の神）や『海と毒薬』（日本人の罪意識）などが有名です。ただこれらの小説で気になるのは、著者の宗教観や問題意識が、明確に登場人物のセリフや地の文に反映していることです。

今回紹介する『深い河』においても、『論理的で不寛容な西洋の宗教』対『曖昧ですべてを包み込む東洋の宗教』という単純な構図が、主要登場人物の一人である大津の口から繰り返し語られます。それですから、この小説は著者の宗教観と相性の良い人以外には、押しつけがましく感じられるかもしれません。

私も以前この本を読んだ時にはそう感じました。特に著者の宗教的信念がにじみ出た文章や、著者が登場人物に語らせる神学的な議論のパートに差し掛かると、やや興がそがれ、物語と自分との間に距離ができたように感じました。

そこで先日読み返した時には、そうした宗教的な議論を一旦カッコに入れて、物語自体を深く味わおうと努めました。すると以前読んだ時よりも、より登場人物に近い視点から物語をたどることができました。物語の外側に立って、それを対象として分析的に理解するような仕方ではなく、いわば自分自身も物語の中に入り込み、その流れに流されていくような読み方ができたのです。

なぜこのような没入的な読書体験になったのでしょうか。この小説において読者を物語の中に引き込む鍵となっていると私が思うのは、「巡礼」という要素です。読者は、登場人物一人一人の人生の道筋を辿りながら、あたかも彼らの巡礼の旅に同伴するように、物語の流れに沿って進んでいくことができます。

この小説には複数の主要な登場人物がおり、それぞれが「業」とでも呼ぶべき未解決の過去を背負って生きています。彼らはそれぞれの過去と向き合い、新たな生の意味を見出して未来へと進んでいくために、インドへの団体旅行に参加します。一人

ひとりのインド行に至る事情が、〇〇（登場人物の名前）の場合」という章に分けて丁寧に語られ、あたかも支流を集めて大きな川が流れていくように、それぞれの小さな人生の物語は、ガンジス川のほとり・ベナレスという町で合流し、『深い河』という大きな物語を形作ります。

「必ずこの世界に生まれ変わる」との言葉を遺して死んだ妻を探す磯部。信じられる何かを求めて、自分が捨てた男をインドに訪ねる美津子。深い孤独と、死に直面した経験からの救いを、動物との共感に求める童話作家沼田。インパール作戦とその撤退戦に従事した体験から、心に深い傷を負った老人木口。これらの登場人物が、自分の人生に対して決定的な意味を持つ過去に促されて、それぞれの救いを探す様は、さながら巡礼する信仰者のようです。

彼らは特定の信仰を持っているわけではありません。しかしその救いへの希求は切実です。そして読者が聖性を感じるのは、彼らのその切実さに対してです。彼らがそれぞれに見出していく救いの形にではなく、彼らが自分の過去の傷を、現在の生に包み込むように統合して、未来に向かって進もうとする姿そのものに、読者の胸を打つ力があります。

「巡礼」というと、特定の宗教を持っている人が特定の聖地を巡ることのように思われるかもしれませんが、現在の巡礼はもっと個人的で、多様なものになっているようです。宗教学者の星野英紀による四国遍路の研究によれば、徒歩の遍路は一人で行うケースが多く、その動機は、特定の信仰に基づくものよりも、「精神修養」や「自分探しの旅」等の方が多いそうです。[脚注1] また、このような個人的な遍路行を通して、「一度失われた自分と周囲の世界との関係を再構築することができた」、そしてポスト遍路生活への指針を得た」という話をよく耳にすると言います。[脚注2]

『深い河』の登場人物たちの物語も、こうした現代の巡礼者の典型として捉えることができます。彼らは団体旅行の参加者としてインドへの道を共にしながらも、その目的と動機は各自で異なっています。互いに必要以上に親しくなることもありません。ただそれぞれが個人的な過去を背負ってこの旅に参加したということを認め合うだけです。

このように考えると、動機も目的もばらばらの他人どうしが集まって、しかし目的地を共有する団体旅行という形式は、現代の個人化した巡礼を描くのに適した設定に思われます。この巧みな設定の下、登場人物の巡礼の様が、彼らの過去に基づいて説得的に描かれることで、読者は容易に彼らの巡礼の物語に入り込めるのです。この点が、『深い河』という小説の最大の魅力だと私は思います。

確かにこの小説には、本当の愛とは『人間の持つ悪の姿』「一神教対汎神論」「宗教間の争い」など、様々なテーマが描かれています。また、著者の遠藤自身にそうした問題意識があったことも確かでしょう。しかしそうしたテーマを初めから想定して、それを読み解くための手がかり・あるいは一種の舞台装置としてのみ登場人物たちを見るならば、彼らが固有の物語を生きる一個の魅力的な人間であるということを見逃してしまいます。

ともすると私たちは「純文学」を読む時、そこに何か深遠な思想や象徴的な表現を見出したり、人生観を変えられるような何かに出会ったりしなければ、「ちゃんと読めた」気がせず、物足りなさや落ち着かなさを感じます。小説から教訓や「意味」を発見しようと読むことが、かえって物語そのものの魅力を損なってしまうのです。

そうではなく、一人一人の人生の物語を共感的に辿るように読んだ方が、この小説は動きを増し、生き生きとしてきます。とは言えそれは、物語そのもの・登場人物の人生そのものを深く味わおうという、いたって素朴な読み方にすぎません。そしてそれは素朴であると同時にまっとうな小説の読み方だと思います。

というのも、小説を読むことの楽しみは、そこから何かを学ぶことにとどまらず、そこに描かれる人生を辿ることにまで及ぶからです。換言すると、私たちは小説を読みながら、「そこに描かれた人生を生きなおすこと」を楽しんでいるのです。したがって、読者にどれだけ深い生きなおしの体験をさせられるかは、小説あるいはその読書体験の質を測る重要な基準の一つです。

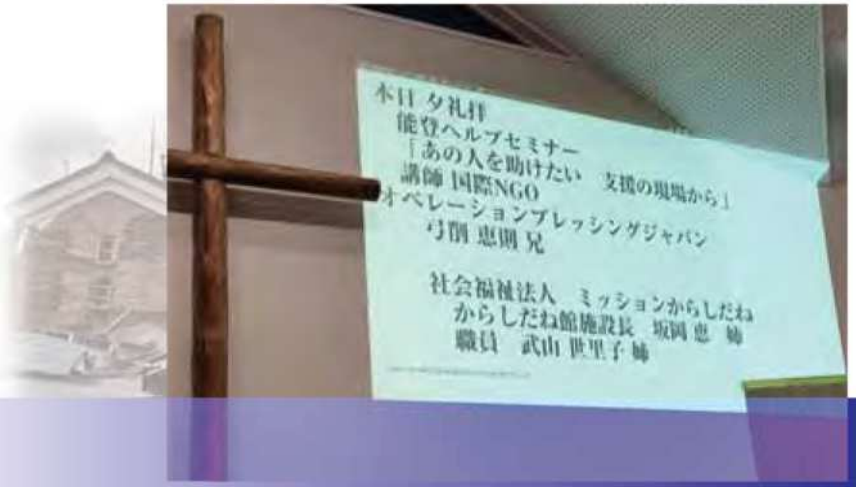
この小説においては、「巡礼」という要素が、読者にそのような深い生きなおしの体験を可能にします。『深い河』が優れた小説であるのはその意味においてであって、そこに盛られた著者の思想や宗教観は二次的な魅力にすぎないと私は思います。

【書店員G】

脚注1：星野英紀「聖空間における絆の生成」（池上良正他編『岩波講座 宗教第6巻絆』岩波書店、2004年、53頁以下）54頁。

脚注2：同書、54頁。

被災地レポート



金沢独立教会を訪問し、被災された方々と関わるときに大切にしたい心構えについて、福祉の視点からお話しをする機会を頂きました。

能登ヘルプの代表を務めておられる岡田仰牧師が、「クリスチャンの被災地支援は、被災地に『仕える』ことだ」と冒頭であいさつをされました。「仕える」ということは、「○○をしたら仕えている」と言える、そんな単純なものではない。だから、傷んだ人、弱くされた人とどうやって関わったらいいのかを少しでも知り、「仕える」実践をしましょうとのことでした。

私たちは、からしだねで大切にしている、障害のある方々への支援について、その考え方や心構えを紹介しました。熱心に聞いて下さっただけでなく、その心構えを記した「災害時あの人を助けたい」のガイドブックを帰り際に何名もの方が求めてくださいました。

話しを聞いて下さった方、ガイドブックを手に取って下さった方が、被災地に「仕える」人として、小さなアクションを起こして下さいますように…　そう祈りつつ京都に戻りました。

▲「災害時あの人を助けたい」
著作：ミッションからしだね
発行：「市民ソーシャルワーカー」育成プロジェクト事務局

新刊のご案内

3月29日発売

『牧師・大頭の「焚き火」日記』

著：大頭眞一

【定価1,700円（本体1,500円+税）168頁）キリスト新聞社】

人に出会い、話を聞き、聖書を語り、祝福を祈る、ただそれだけにとても奥が深い。日本が知らない聖職者の日常。

篆刻の達人、旧車オタク、ロックアーティストとの出会い、神学談義、地域の地鎮祭と牧師の祈り、結婚式で大ミス、教会で般若心経を読む会、イタズラメールとの戦い、バイクと事故と入院、ご近所さんとのカラオケ、特殊詐欺事件、イギリス留学……。ゆるゆると流されているようで、何かに導かれるような、ひとりの男の物語。

大頭眞一　おおず・しんいち

1960 年神戸市生まれ。北海道大学経済学部卒業後、三菱重工に勤務。英国マンチェスターのナザレン・セオロジカル・カレッジ（BA、MA）と関西聖書神学校で学ぶ。日本イエス・キリスト教団香登教会伝道師・副牧師を経て、現在、京都市北区の京都信愛教会と、京都府八幡市の明野キリスト教会牧師。関西聖書神学校講師。

主な著書：『聖書は物語る　一年 12 回で聖書を読む本』（2013、2020）、『聖書はさらに物語る　一年１２ 回で聖書を読む本』（2015、2019）、焚き火を囲んで聴く神の物語・説教篇『アブラハムと神さまと星空と ― 創世記・上 ―』『天からのはしご ― 創世記・下 ―』『栄光への脱出 出エジプト記』『聖なる神の聖なる民 レビ記』『何度でも何度でも何度でも愛 民数記』『えらべ、いのちを 申命記・上』（2019 ～）

第４回　ＣＬＣからしだね書店　トークイベントのお知らせ

『私は、日本社会をさまよう難民たちの「隣人」であるか？』

2024年7月6日(土) 14時～16時

からしだね館及びオンライン

問題の多い「改正」入管法が成立して一年。いよいよ6月から本格運用されます。長年、難民、在留外国人、海外ルーツの人々の支援に取り組んできたビスカルド篤子さんに、これまでの活動や人々との関わりの中で、ご自身の人生がどう変えられていったか、存分に語っていただきます。

＊詳細は、「からしだね書店便り」5月号でお知らせします＊

◆講師紹介◆

松浦ビスカルド篤子

カトリック大阪高松大司教区シナピス　副センター長

1963 年生まれ、神戸市出身。カトリックミッションスクールで社会科・宗教科の教師として働いたが、1991 年の湾岸戦争をきっかけに、カトリック大阪大司教区「平和の手」（現シナピス）に転職、カトリック教会を基盤にした人権ネットワーク組織の事務局に所属。シナピスのなかでも主に難民移住者の対応にあたる。神戸女学院大学非常勤講師。大阪市在住、ダーリンは南米ペルー出身。

◀▲写真は 2020 年「からしだね通信」6月号で取り上げた（ガウンプロジェクトの）記事より

古書献本のお願い

たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担いただけるとありがたいです。（受付できないものもありますので事前にお知らせください。ご事情により当店より回収に行かせていただくこともあります。ご相談ください）

【献本をお願いしたい本の種類】

1　キリスト教書、キリスト教に関連した本（多少、書き込み等があっても、大丈夫です）
2　哲学、心理学等、人の生き方に関する本
3　社会の中で起きている問題を扱った本
4　暮らし（料理、健康、経済等）にかかわる本
5　小説（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）
6　漫画（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）

百科事典・辞書・開封済みのCD・DVD・月刊誌・週刊誌等は受け付けておりません

【本の送り先】

住所：〒607-8216　京都市山科区勧修寺東出町75 からしだね館
宛先：CLC からしだね書店　献本係　　電話：075-574-1001　FAX：075-574-0025
Mail：clc @ karashidane.or.jp

【本と一緒に以下の内容を記入したメモをお願いします】

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィールをお願いします。

【献本感謝】

藤井久美子様、大橋弘様、福本佐和子様、大津清一郎様、松本裕喜様、梅垣英子様、西澤幸一様、井筒桂子様、大岩様、荒井美江子様、匿名希望一名様（順不同）

3月の古書の収益は 39,345 円でした。

【古本の売上を含む CLC からしだね書店の収益は、書店で働く障がい者の工賃になります】
献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思います。匿名ご希望の方は、お知らせください。ご寄贈いただいた皆様、ありがとうございました。

編集後記

◆新たな年度のスタートです。今年は桜が去年にくらべて遅く、ちょうど入学式にぴったりの見ごろとなりました。書店も新しい気持ちでスタートできたらいいなと思っています。◆４月６日（土）夜、金沢独立キリスト教会で、職員２名がソーシャルワークの視点から、被災者とかかわるときのポイントについてお話をさせていただきました。皆さん熱心に聞いていただきありがたいことでした。◆翌日はふだんから交流のある内灘町のＣＬＣこひつじ書店を訪問しました。とても清潔で優しい雰囲気のお店でした。書店の運営は日に日に厳しいものになっていますが、これからも励まし合い祈り合いながら、がんばっていきたいと思います【店長】

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援Ａ・Ｂ型事業所からしだねワークス
からしだね書店＆カフェ・トライアングル
〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町 75 からしだね館
書店電話番号　075-574-1001　ＦＡＸ 075-574-0025
書店メール　clc@karashidane.or.jp

CLCからしだね書店便りのバックナンバーはこちらから
↓